初等部だより　１１月号

鎌倉女子大学初等部
令和８年１０月３０日
第 ８ 号

AIと教室――『自分で考える』を問い直す

部　長　　大塚　俊明

数か月前の新聞に、松任谷由実さんがAIについて語った記事が載っていました。一年前には「人の心を動かせるのは人だけ」と断言していた松任谷さん。しかし、急速に進歩するAIを前に、その確信が大きく揺らぎ、「正直、途方に暮れる感じがあって」と戸惑いを語っています。

私は今、この「途方に暮れる」という言葉に強く共感を覚えるのです。

AIは文章を書き、難しい問題を整理し、音楽や美術の分野でも驚くほどの力を発揮しています。かつて人間にしかできないと思われていたことも、次々とできるようになりました。こうした進歩を見ていると、私たちは人間とAIの関係について、これまでとは違う角度から考える必要があるように感じます。

学校教育でも、「自分で考える」とはどういうことなのか、改めて問われているのではないでしょうか。私たちは、子どもが自分で考え、判断し、問題を解決する力を育てることを大切にしてきました。しかし、AIは答だけでなく、そこに至る考え方まで教えてくれます。しかも、その力は今後さらに高まるでしょう。

これまで、AIに頼りすぎると、「自分で考える力が弱くなるのではないか」と心配されてきました。しかし、私が心配しているのは、それだけではありません。自分で考え、判断しているつもりでも、何を疑問に思い、何を大切だと考えるかということまで、知らず知らずのうちにAIの影響を受けているかもしれないのです。しかも、AIの答えが優れているほど、その影響には気づきにくくなるでしょう。これは、単に考える力が弱くなるという以上に、人間の「在り方」そのものに関わる深い問題だと思います。

もっとも、私たちの考え方は、もともと周囲の人々や社会、文化の影響を受けながら育つものです。AIもまた、私たちの考え方に影響を与える新たな話し相手になりつつあります。しかし、私たちはその影響にどこまで気づき、自分の考えを見直すことができるのでしょうか。AIを遠ざけることも、頼りきることもなく、うまく付き合っていくのは、思うほど簡単ではないのかもしれません。

先日、教室を回っていた時、一人の子どもが先生の指示ではなく、自分の判断でAIを使っている姿を偶然見かけました。何を尋ねていたのかまではよく分かりませんでした。しかし、ふと考えました。AIが示した答を、その子は自分の考えと比べているのだろうか。それとも、AIの答えがいつの間にか、その子自身の考えになっているのだろうか、と。

すでにAIを使い始めている子どもたちに、小学校教育はどう向き合えばよいのでしょうか。次期学習指導要領に向けた議論でも、AIの活用やリスクの理解が重視されています。しかし、それだけで十分なのでしょうか。AIから受ける影響にも注意を向けながら、自分の考えを見直し、深めていくことが、これまで以上に大切になるはずです。それを日々の授業の中でどう実現していくのか。これからの大きな課題だと感じています。

子どもたちとAIとの関係がどうあるべきなのか、私自身、まだ確かな答えはありません。しかし、「答は教室にある」という確信は、今も変わりません。教室には、異なる考えを持つ他者と対話しより良い判断を生み出していく、手触りのある人間関係が確かに存在するからです。

AIとともに生きる私たちは、何を問い、何を大切にし、どのような人間でありたいのか。そのことを、子どもたちとともに考え続けたいと思います。